ヲ 9
3799
2

薬湯投入花之事

一 薬湯投入の花の法ハ立花事ハ遠く宜く生る也 綫懸の根浸く
本末ぬく添合もし庭さしく生ある也 形要ある所越て シヤウ生
花の水揚多ふ入うし 左右の法や 是故ハ土地ふ生し 多る 姿形
少生し 多数形 ちん綫多し や まけ 高く生し 多る物ハ高く生
卑く生し 多る物ハ ひきく生る 不生し 多数物ハ 花の心を然
雑沢山ふ入る 枝ミ明(アケ)て 生く庭し

一 杜若 菖蒲 河骨 蓮

門 ヲ 3799 號 巻 2

昭和十六年一月十一日 寄
尼野貴英氏 贈

右の數と色入廣口ニ生て水指有之入せ御通一輪ハ
下葉也花　水仙　梅　椿　菊　さうし　あやめ
右ハ數足合細口中口ニて水嶋足皮枝ニ生座く
一 花ハ大がつちりとて廣口ニて水仙菖蒲等の事もきき
但又ハ小牡丹　小芍薬　大椿　なとの大輪生て面白し
一 掛筒　古銅　青磁　砂張　陶古　写物あり　天八寸
但し天八ハ直も入ニ用ひて掛筒同様にいけ高き花又ハ水
追の花ないけ又ハく本花をいけるに付ても足生き花生之

一 籠花生　大小同意
内ニ竹の入子ニ水を入生之水ひしくハ川上ぬくい用也而て水
一 ふ新花ハ何ニても生る之大籠ニハ花も葉も沢山ニ差込生也る
も寛あるも好之
一 但し直花入ニ宗ニ全好なり是も好其の入子　水あろて
夏などろし花ニ一文字の花くまり生ハ
一 掛花入ハ枝ものけし
一 車ニハ花生中ニ小き古銅なとり薄磁の細口

よくとれ候か 備前唐津瀬戸なと 焼物を用花ハ此也
〆座し 是ハしゝかたく生る之草の足より外へ出の
出る事を大事嫌ふ足より内にて小花生座する大花の事
らん嫌ふ事之
一 数寄座にハ小枝を手あらく又ハ枝折あり無し
二 〔両云薄板置様之事也〕 真中床　四尺床　壹間床
三尺奥床　床縁より　廿一目
小床ならハ　十八目　十九目

一 左右ハ真中
但し前六歩　後四歩ニ置すへし
一 板床にハ子葉花生置様ハ同ことく得也
一 一花一葉　二葉二花
四葉四花　六花六葉
右嫌ふ座しきれいを敷葉ハ形あしき座
菊之葉菊　紫苑　右之枝葉の沢山を貴ひのまれ
葉数不揃

一 菜の名物銭花斗せる事ハ　梅桃、
菜と菜の也る也ぞ花嫌也人をかゝり銭費ス柳ハ花
あるき物ニて菜斗を費ス
連歌ニきらふ事同前
一 柳ハ極月ゟ正月迄の内ぞかり入之
一 かれ柳を嫌ふ又柳のしまり也る事ハ銭嫌ふ
一 花菜ゟ新あるき事ハ銭嫌ふ
一 花銭三文四文せる事ハ銭嫌ふ

一 寒銭せる事ハおしくいかゞ嫌ふ
南天　梅もどき　せんりやう　柚子等
付ハ菜の類ニハ不用
一 時候をつまり無るをハせ中るをもつし九月ニ揺せ無る
人ゟりし銭をも露嫌ふ無まり無る花ゟ又名人無り以ヶ候とも
又人好をありとかめてと論して門人にハ百旬の遠八無
なをハ生気ものゝとさくやきよ中よ文ぎしハ
一 まつ海しの菜の海ニハ前文ヶ様をせる事嫌ふ

一 祝言等の席ニハ椿の花よしからさる花を嫌ふ

一 梅　菊の花　萩の花　鶏頭
きんちやく花　鳳仙花

一 四季ともに活込ニ咲何すみても青花皆嫌ふ

一 花枝葉ともにめつらしきに切ル事あしく

一 一日花

一 元日ニ活る花　白梅　正月ふたえのき花七ツ枝

一 三月三日　柳　桃　七月七日　香炉草

一 九月九日　きく　すゝき
是を一日花とて花ある時活ゆるし　時節の日ニせ外ニハ

一 金の花入ニ水おす事ん秘あり当世何の目けもなく花入綫
ニ水漬けし花を入申す之花無紋の花入ハ水ニ漬けても
よし水際ある紋のある花入ハ水ニ水つけ候事つゝしみあやふく
中さぬものなり是故ニ水ニ記くし申す嫌ふ之嫌様ニ所以
其外ハ紋せ外ハ無紋の花入ニ活けハ紋の水とよけく紋ある
ニ入ニ水折届し是秘事

一 茶碗の茶入おするなし 茶碗ハ常ニ茶を入る物を
置ハ水をおくへからすなし されとも茶碗の[illegible]より
手際見へ中なるハおてもくるしからす候。

釜の事

一 阿弥陀堂 大小 一 尾張 大小

一 丸釜 大小

古三家ハ利休好之紹井釜といふハ今あり是ハ古代に
なし 後代の好と申候之 [illegible]何にても[illegible]風呂あり[illegible]

釜[illegible]ハ申[illegible]

一 雲龍の釜 大井小

是ハ利休好之風呂ニ[illegible]之 但し此釜風呂の時ハ龍の
頭とむかふあうけ 爐の時ハ[illegible]
自在の時ハ[illegible]て[illegible]風呂の[illegible]も[illegible]し
[illegible]之

一 四方釜 風呂[illegible]

[illegible]ハ[illegible]て[illegible]ある常[illegible]なり[illegible]て取申候

肌ハかんにて 石目つまり 団子つまりたる肌ニあまり
是ハつまり之
唐金肌ハ利休因富の薬鑪の肌にて 走り懸ハ其て
釜をましらに合るもの之
目立中をり并鐶り々涛ハ頭蔓とて四方釜鐶付合る
涛る味かあり
一 唐丸釜
是ハ利休好鐶付ハ本之肌合にて 挫の耳と中は

又つの鐶にてうけまし 結なし
一 鶴首釜 丸の常鐶付もあり
是ハ細の風呂別にあり 火ある風呂之
一 百会あられ釜 焼口
是ハ利休好小型大業湯し 釜之
一 姥口の釜又ヨロシ 中にても 摘ハやり 打返て
湯口へて肌ハ しさするを 持ちとた中 待とし之
一 一切の釜蓋いつまでも 肌之 是ハ利休好之 唐金釜蓋ハ

織部の御数寄之利休も好しからしご用ひ申候古去常能
かゝ釜ハ好つてあらしく石目肩釜の好てちつくありて
西家とて利休時代いつまで石目のよし芦ハ古る大蘆之
一 芦屋ハ形ちかわろくあり押紋あるハ雪舟の画あり
羽ある釜多し形の古釜も多し形はいろく御数寄あり
一 関東作とて東山時代ある申候釜ありて後も追て出申候
利休好の釜あるハ天猫と申候
一 関東ハいつかたも打分り第一今ハ釜鋳申候乃芦屋天猫

といふもあり是ハ鋳手の仕様と天より猫かりて押し多る
まり天猫といふハ少し今ハ致天明と出申候西国ニ而宗の用ひ申候
一 田舎釜とて諸国ニ而御数寄得有申候
一 寒雉 カンチといふも 両云加賀也 関東之鋳人の銘を写り申候上作ものゝ之
紹鴎利休時代之
一 利休時代釜師ハ与次郎之釜師同時ハ京之与次郎今
代々京都三条室町通ニ住ス御釜の名といふ一切釜ニ
外様鋳物その外し申候

一 九兵衛といふハ宗旦時代之釜師之

一 浄元といふハ宗旦時代名越と法名をいふ是ハ千家の
宗匠時代をさして其以前時代の名越 宗旦時代の名越とい
ふわけしれぬ之

一 浄味 浄林 是も京都の釜師之利休好の釜を
鋳出之上作之

一 少庵好あられ釜ハ姥口切合之蓋ハ古鑑にし裏に巴の
押抜ありて面白きもの之少庵其鑑より釜をもとめ候て

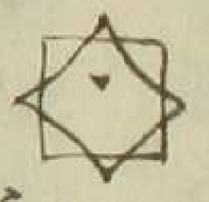
好ミたるとし鑑し面ハ好ミの裏にありて巴の印ハ蓋の表之
汁風呂ハ珠光にてくろんミむかふにてそうしゐ香の炉と云也
香の炉と風呂といふ之釜計ハ炉にかけて菓の湯の炭にも
用風呂に元釜かけ始也 唐にて菓子に用也
併し面元風呂なとも風呂に元釜かけ始ハ菓の湯の炭にも
[illegible]
併し汁釜も少庵好ハ宗旦持参し表千家は中京都
古代の花鏡にて夏之釜にて鐶の下にあると[illegible]も

ちゝも一座懸ケ候此釜ハ堺の海船屋ニ至宝しあるよし
是ハ一蘆宗雪時代之

一　四方口の釜
是ハ宗旦好之口四方也して其ハ相違あり釜蓋も共
此釜ハ釜沸ぬく切立ニ蓋十文字ニ角透ひにいたし也

中ト

一　小田原風呂とて数風呂也



此道之
釜の口
釜の縁くツマミ鐶付ハムケル

是ハ利休好ニて小田原の陣中ニて太閤様ニ御茶上られし
時月ひとつの松の四方ききニて志るし也御手ヲ懸ケ土スキ本
ニて釜かけしもの之新釜も小田原の地にて鋳せある
釜とかけしも御出羽釜之御好と　釜ともいふ

一　田口釜　古代之遠州好出来一時あら世上ニ写あり

一　万代屋釜　是ハ利休時代利休の弟子　万代屋の好之

一　筋溝
是ハ利休好之

繕ひの月をそへ紐あり　魏付　鐶ハ鬼面

當口にてちはく之

一 国師百代座聯溝茶とこの大釜かけ申ら時ハかき炉
とて炉の四方九寸也 ぬる之是も古代ハかき炉とて面白
きもの之

一 釜の口たきにてぬるゝをぬるゝ金にのとうしき時ハ釜のぬる
金しおちふく 釘よく打して ぬるゝを先のを一つ申は又釜の
ぬるゝ殘しあ板をうけ申候ハ 元の通りにいたし置申候

一 炉にスキある釜うけ申候ハ是ハ甚まきり面白し

あつさりとして宜古代ハ二月三月にかけ申候面白くして
釜のゑんに鐶付て炉中一つちの釜を掛 関東造りを
面白き平釜なり

一 土風呂にも遠州風呂あり 是ハちいさなる風呂にて風呂と
板あり肩あるを極黒く面白し かの大きなる平釜をうけ
申候

但し [illegible]ぬる [illegible] 風呂あり 是も平釜うけ申候 風呂之
風呂の上まで通して釜うけ [illegible] 四角に文様の形あ

きぬた之

一 乙御前

是も利休の好の釜也 丸釜の小の位ニて撫口之口のまはり少し広くすりのおとしくぼミを付し乙御前と名付たるにしたるにちいさきつまみあり 是も稀有之

一 姥さん釜　紹鷗好

是ハ丸釜の様ニして手でぐるニて重よき形之蓋かぶせ之

是ハ利休と紹鷗より此ハ兵庫与次郎ニ申 茶の湯

茶るか御来るも利休前孔ニ系ら流にけてかへし与次郎ニ申丈か姥さん釜といふよし

一 裏甲とて利休好たる　就常法之

釜の中ニサイツキ五ツアリ サイ小穴あり 裏甲の様極あり

就年経び也

但し此釜掛る風呂を西瓜風呂といふ 西瓜風呂ハ形よろしくほつまの釜ニもよく似合申之

一 世上ニ蹲蜷といふ風呂をもつらし 蹲蜷風呂と申る云

いそ紙踏ハ琉球より古く風呂釜　湯を沸して　紙
踏挽しうきまなどて用ひ来りしよって紙踏風呂と
名付けり　後ニ釜栈物数寄好りて田口の釜といふ式
釜サイ釜三ツ穴あるし　世ニ用る琉球風呂とハ違ひ其釜
如しひろく座敷にて挽しうき形にてハ宗意ある
事之

一　紙踏のかけしきといふも形ハなつめにして足るの
如くきえて猶是を造といふ天下の口張りおくぐ大茶湯

什物

一　薬罐釜といふハ是ハ湯の宗法といふ湯瓶に用る式
堂ひらいて飯を湯も煮るよし　清器　和尚の居士まて
釧手釜小清器　釋師の文字あるよし　是ハ此釜
堺綿町　和泉屋吉兵衛といふ人所持之海二　鋳まて
つまミ宗の物之つまミある形形和文字之

一　釜の鋳ふ　紫ふく　一名字ふく　すゝい鋳　ユメウ鋳
これ物数寄し鋳ふ多し　先かうてるなし　此あし

四ノ之

一　かうらくに出目　くさらかし　西瓜葉

萬かうらく五

一　津中そこハ分く　物数寄也

一　飾年　古法と山（定）　せしご　しらミ

南附（静）歎ある飾年を貴覧まゐる之

一　文字葉の出るやうの時ハ袖を風呂いむうふ

一　一旦年ゟうへハ妙風呂も前くまい

一　さんぬ年起うつとおきらけてよし

一　少飾ある風呂ハつぎめ寄年白　絹手年有

継し風呂葉大常飾ニて重し時風呂斗のうハ

葉の通ふしてもよろし

一　通来ハ紅時ハ絹手か左の手ニて紅左の　手の込く

のせこ上へ寄年を紅のせてうちこみるへ左の手ニて風呂

あらハ手今のむうふに直ス葉うけ出時直ニ出ハ左の手ニて

左右の手の込ミへのせ寄年か直ニ絹手年残後ニ直通し

一 炉の時遠山ハ風炉の道具とちかひてくわんのむかふに置へし
釜の左ニ置之
向切なとハ釜ト遠山と並へておくへし
一 世上ニ大板とて長板の縦きわり古代ハ無之後代の拵
数寄屋之長板風炉の置合ニ置之 当時
一 紹鴎 宗運拵数寄屋ニて大板置合ニ置和泉守殿急拵
も板の拵数寄屋も一紹鴎拵数寄屋之
一 古き風炉の長板ハ大風炉なとハ小板ニ小風炉なとにハ

小板の大さ台面なし
一 小板の板目蒸き有之
一 小板の下へ茶出 四ツ折して置へし
一 鉋風炉土風炉金風炉なとハ丸板置へし
是も下へ茶出置へし
丸板ニ土風炉置候ハヽ小板ニ金風炉
置へし
一 種子島の目 大風炉なとハ十一め小風炉なとにハ

九ツ目

一 四畳半ニ風呂据る時ハ風呂の向二尺七寸半明て

立法之ことんハ小なる時ハ壱尺五寸七分半之 ましへ五寸加へて

都合弐尺七分半之

但し跡のかむりぶ時遣ゐて 壱尺弐寸五分塗りて 見合ニ

古き之数寄屋小さき茂四畳半風呂据ル時 寸法之

二尺七寸五分半の法理ニ大目畳ニ五寸明 立割合之

但し大目畳ハ四尺七寸弐分半之

一 釜の蓋さて大炉との蓋并風呂ニ見合之

一 鉄ひんとて鉄手ゑて者ひ鉄のとらんの抽物の古

作彰纔大猪上び人老人ハ茶数ゑて薬湯式試小者ひさる

人ゑよりて式試ゑ者ひあるまじ

もよふし

一 金風呂ニ小環あるハ上くあげ可申ハ上ケて置ハ異風之

蔵して置く古風ゑて面白し

同断右可申と師申候

一 書院庭前錺りて釜飾る事

一 錺りて釜飾る事は書院あれはかきつけ小庭前板
家屋なるもうけ申候事也之

一 書院の飾る板金屋のつき錺のなさけふ至
八畳敷は六畳敷十畳敷にて見るは錺りて釜
うけ申候之其の形見は芦屋造之 又はかき古代の釜なと
急に候へきうりは錺は錺り唐物もの其卅七尺年の錺之下合
七寸目位小小ざる可け時のつるは不朽張らて志んちう又は

一 くさりかして釜あり釜の鐶常やうん又うけもろし
● 錺る例し法錺唐金物てうかんなとあらは釜の錺は
志んちう銭うけ申候

一 くさりは書院の飾くさりの為にかきつけ小庭前板飾り
釜うけ申候事也之

一 太二尺八寸柱ある庭前板ありてあらうけ候

一 くさり自在竹 もくは菓点にて細なし乃点つり
釜沸茶ちうなきては流りこめるとかふて炉にもうひ釜

を下へおろし候

但し濃茶ニよりて炉ニむかひ菓点かゝりは茶釜を

蓋あけるもあり是ハあしく

一 くさりにて屋鐶之節ハほとろくと揃ゆる時 [節] 中

かぎり香合かぎりてくわん鐶かけは茶ニ小かき鐶左の手に

てもつし左の手にて治るのさうけにかぎを上へうけ釜

の上ケよき様ニして釜を丈ケ釜鐶卸し釜鐶かけ

又左の手鐶くさりの下うけ右の手にて又にかきを上へうけ

是ハ屋の鐶よき様のしめ之丈ケ常の通りかきまとも

之て位置ニ小かき鐶おろし香合を入て釜をかき中候

但三重之菱以上の広菱なるハ釜あけ中候て鐶右の

方ハちすし左の方ニ添にて取はずし釜を左へ中候

又鶴首炭ニて無しうて治るの中へくわん鐶入釜中候

一 うけ中候時ハつる鐶右の手ニて左の手にて釜の左くわん

鐶うけ左の手鐶つるにうけ右の手鐶右の鶴の方へうけ 炉

適までもつとうけて中候

一 自在ニても茶杓にても立かゝり候時 釣にあらす事なく
息仕廻て後元のことく上ヶ置之
一 自在作りを釣事ハ不き物ぢ 又座敷ニよりかハ清ニ不成
ふし平守なと切元事ハ
一 自在竹釣釜ニコサルヲ右むけて釣り猿といふ心より利かく
ともふたの手にてかくをしめ右の手にて かくのちるをと上ヶおろ
す座しつるハ左の手を上へまくへし 左の首にて鎖の方をとらふ
座し釜上ヶて取置事なれハ清る釜なとへなとし下ニ置

白鳥なれハ壁に清ると云て置へし
但し右炉白物なれハ清る釜にあらす之事

水指之事

一 臺子ニハ古ハ金ニて支ゆる 南蛮不残其外体の棚物ニハ
仕臺子長板なとにも いつれも唐金其外ハ瀬戸の水指 蓋
なり 或ハ南蛮 唐物 染付之 伊賀 信楽 備前 高麗 唐津なと
ハ 水指を始蓋を 臺子棚ニハ 侘人 有るしら 次
先ハ臺子棚ニハ瀬戸 南蛮 唐物の染付 唐津の棚よし 之外

柄杓の〆行を置ひきてもよろし 勿論平点ハなるしかし
ぬり蓋の水指の時ハ七分目入て小口ふきておく事も
よろし 但しちやひ点ニハぬり蓋ニても露をとれ無用のしかを
台子の時 但し台子飾柄杓の飾の時ハ露を切ふかず
但しぬり蓋ニハ小口蓋を切ゆべハちやひみちつき不ハ露をとれ
ぬりもよろし 点茶の所ニつきぬりハおかりて露を切べし
かしこ

一 台子飾ニて点し 茶入時ハ点茶済て又ハ口ふきて置を可然し

又紙釜柄杓ハ平水指ならバよろしきたりても南蛮ニても又ハ南蛮楽
焼などの釣瓶 高サ四寸斗ニて柄の付たる戸の内へ入用之ふやきハ無
らハの水さしとやら平点ニて平水指とてきぬ之
あるにハ水指の上ニ蓋をおきて文字もおり文字かく蓋置を飾
ることもある之水をくみはなすふ柄ものみ之柄ニして扱あける水
まるれの茶露をとられてをうるなり

一 かさりの方大柄杓をてあるものあり他ハ宗宗室かさりの置
わられ無るとき大柄長ならていふその不合付柄杓丈夫

舟ハ水屋棗ぶん木ニ裏にち梅といふ事あるよし千度追て

鐃中ハ今ニあり

一 利休好桁曲水屋ニてまち目をまへ向して置ふ座ニ好る板

目横なり好るの元相ハ板目横ニして何ゟも家前ニ直へし

好る繕手前ニ置くハ水屋にて底ニ而る迷家前へ好ミ立うけ

相ハ外のへすといふ人之時水さしかきり無る元相之時水屋好

きておすと

一 桧物釣瓶 水屋 利休好之掛の事好る元ち利休作之まヽ

勝手置ゟ前のむかふかへさし指て おしつけあへする板右の手にて元盆

舟前ニ残り無る事板好るの上に並ぶ又六寸も おしつけて並るなり 指て

おし指ハ右の手ハ上のさんを指左の手ハ水さしの底へ手をうけする

よし 無くハ夏用ゟなれ元来ハ是ハ銘葉の酒る律ふ

無きよし也 秀吉公太閤様へ利休山崎好ミ唐にて有

るの津海ニ御茶上るニ元頃て井戸掛の水手好り立てる

を見ておられけれハ 太閤様大に御よろこひに成らせ給ひ候

又深くかへの茶酒ニ夏用る是もよしみて不用相ニ中心へ者

冬の飾事一ヶ月ニ四季共ニ飾之

一 生花桶悪敷ハ水仙有一ツ是等の事之見て手を掛て無之

時々あしらひ用ふ之其の時々を取有の手を以て見積竹の首より

用ふの時々の上にも差之結様同前也

一 細水仙 插抄もひ事一つあり

一 汀口の小を水際用又水さしの替りにても用ゆれハ感徳にあ

ら花かりを用ひると覚へし是も時き切て炉のときハ時き切てに

を置の下向風呂のときハ風呂の前へ向る時々枝目ハ横にして結

手前の方へ立かけ又口の上ニ置てもよろし之

一 菜花類又竹くせんし寄せ水仙の替りと用ひもする口のんだ同前

元手ハ向ふの方へ移さして差之にあらず口も同様なり

一 青磯芋水仙南天類ハ時き切て出るなり梅楼家にハ

くあれハ生るべしかくし挟ハ此外とれ候ことなし

壺の事

一 壺ハ生る所をの葉を挟むと入用有し元来所揃

なり

東山殿時代大中小一服入蒔絵の棗ニあり
棗形の外濃茶ニ遣ふ事なし
一 濃茶ニ遣ふ時ハ袋ニ入事故袋とき拭ぬぐ世
拭ハ大中小共茶入あつかひと同拭なりそれより拭き拭ハ
ましめ棗の甲を拭きとり横を拭き中ス之 胴
一 小一服入ハ左の手の上ニ乗拭をねときふ袱紗ぬぐ世ハ
左の手の上ニ乗拭き拭ハ胴横之 ○胴
一 棗ニて濃茶の時ハ茶を茶碗へ入先棗を蓋へ直し

茶杓ニて茶碗の茶をさばきて棗の上ニ置之
一 一服入をハ棗ニても拂切中ニ而て棗を右の手ニて持なから
持出し茶を切茶碗へ入ル畢しけときハ茶碗へ茶杓を
あとのけてうけ置之茶入の蓋拭同拭なり
一 棗 蓋茶蓋拭ハ
大ハ 甲 あとむかふとをぬく
中ハ 甲あとむかふを拭き蓋しら之
小ハ 拭き蓋しとふ横拭くハ胴へ見へし
一

一 服ハいくつにても右指ニ置ちに点スへし
但し重ねて濃茶のときぬぐふからハ服ぐ見也
一 薄茶のときハ大中丸ぬく服へ入ても茶へ入てもよろし
一 包帛紗ハ両指なり是ハ茶入袋なきを茶入ニして濃茶ニ
きかすや極りにて人より茶よりきひらくきものやされた
茶にとりて何人の亭主にても見合きかすなり
一 筒掃ハ帰之とも急度致候掃ハ帰るへし
一 ぬぐふとき指ハ両手にて茶巾月をひとさき両方へおしわたし

手ハふくさに添たる手ぬぐひのまへむかふをあけたの手にてぬ
ぐきまへをもたし手にて茶のくこ手をとりけぬぐひをお折
ぬくや四方きるきしてぬぐき指ハ常の濃茶茶巾のごとしぬ
ぐきと茶巾のまる法をすら段指にしてぬぐきこしぬくへし
一 又仕指ハ両手にてぬぐひときさ左の手へぬぐひふきとりみ
たしまして茶巾ぬかしにも仕判
一 うす茶入茶
雪吹 面中次 茶桶 茶器

真中次・行中次　両面　草面

但し濃茶にもひらぬ紹鴎好之面

草面　尾張ぐら　よし

行中次ハあらぬあめて内黒ぬり行ぬり宗旦好也

一　地之面とふぬり春泊好あめぬりや

一　あ地の面ハ中をぬりてきふ内ふ地にて茶入中蓋ある

一　中次ハ　東山殿時代の利休あるものや武野の唐物茶箇也

中次袋紙しる

一　中次袋紙と師中ふハあらせぬ事なり武野の時代ある

やはり袋紙に寸法なし　昔ハ寸法定り有しとむかしいふちのハ

当世ハ中次にも寸法なき故袋紙にも寸法なし　殊袋紙無之

棗し無る事のさいハ無寸法なき故に　孫袋紙に寸法なし

大なる中形かりふふより　四方へ出す　程にわし中紙にして

折形ハ全袋紙のごとし　師抱ハ袋物ハ袋棚の番棚にも在や

けんどき薬兵しりて　中次とるへ　ふへ　かへりし袋紙ハ丸中をたため

ひきへのけて也や　手前に出る事なし　中次好き中ときハ

如経がどふきうり中きぬかふよとさつとちらん角へ寄らう
きわろ所の事を嫌ふや中湯ハ角を当たするものなれハかく一
ゑめても角へさゝりゆるゝを嫌ふや茶入茶碗七分中ほどに置る
ものさゝりせて角の津海れるゝのなるへくと茶ひら一つ置れハ
山となれハ何もむらしかわく定座なり茶入おくも角に
さゝらぬ様に一寸余り置へし

一 棗も茶入袋とて紫縮緬黄ちりめんの古金襴の袋や是に茶
湯に用ひるし茶入の茶袋にして茶入袋といふへし 紹鴎

の棗も茶入袋に入て拝見に出されしよし 伝来何も組紐
茶ゟ六用ひるし 名物古き裂のあり 緒ハ中々細き
ものや 但し 打紐どく何もあしらひのるきものなとよへし
緒をとめ置へし

一 金襴等茶入に緒をとめや濃茶を点る中は
唐茶と点ひ中に茶桶 雪吹 抔に同様
但し 海も点ても 点中は 同事
濃茶も用ひるや 由来点様 或ハ家に相す

一

一 唐物の濃茶入に用ル蓋ハ海老津まみ也ましくの
格也つまみ也 袋ハとんす袋よし 唐物の古ハ古歌に有之 一
但し茶さか単ニして草の茶入格ニしてまゐらする
ありし名物の所ニ有之や

一 茶入耳付 蔓付 水滴 油滴 四方耳
三方耳 笹耳 猿耳
是ハ濃茶ニ用ひ時ハ何れも口ある物ハ茶碗の前へ
むく也し

一 蔓付ハ縞をつるといふもの也し

一 三方耳ハ一ツを向ふにいふすへし

一 四方耳ハ一ツを向ふにいふすへし

一 海老格ハ右茶筅をよこへし但し大海の海老格ニて老耳ニ
茶入耳あるとふさいハ取格ニ海老ニ茶入

一 肩口の茶入ニて包ミ中次の格茶形ニして口縁唐物の
和物のあり八ツ代鏡 脇ニ鏡ありとも是ハ海老格ハ茶入の
通ニして茶杓ハ茶碗ニうけ蓋をかへて濃茶点ゆへ通りあり

肩口茶入にて茶点する時むかしつとすると蓋へのけて茶
を入申候ハ茶のおしても丸の袋をまへ振る事也
今もこれ指あり多き茶の口傳之

一 大海茶入とて平くある茶入あり口も広くし茶入るゝ時
右の手の指ゝへ添ふ左の手にて掬く添て茶入るゝや又左の手で
指添して直すや
但し大海茶入のくちむけて茶を入るゝ事を嫌ふや

一 面のある茶碗面の中を掬くへし

一 次のある掬くとらふ世上に次を照立ふハくし口傳茶ハ
次と横あいらすや

一 茶杓をは津まゝの指手付ゝ立や

一 別蓋の茶入是も大海杓ひ同様なり

一 蓋ハ照立ふ立掬き杓ハ照立ふ右の手付ニ利掬ゝのあら掬くや

一 茶碗をすくふ時ハ茶杓指るあれ一方の蓋を上ヶて左の手ひて
おさへてうくの杓をして右の方の掬くとあけて茶を入るゝ之
是も茶の指手付之

件右細ニて唐さの茶入瀬戸唐津日招之

一 鴨香之文ちやん茶入相ハ唐ニ之の扱ひ成ふやれ

一 袋中挹の打ちけ中ルハ粉多いまし蓋ちけ中清キ右の
手ニて紐とめをかいして底を手す今々細のむしとをもちて
うけへし

一 名物之茶入唐の茶入の通りにして底中ニ袋ちといつふても
打ちけ常ハ角の釣棚の下ニ置候しいとを男へ紐メ清手件や

一 桐材棗

一 おうし棗

一 瑞体梅きん海

一 瑞躰あをき母

一 当唐茶筥や

一 裏桐棗

一 檜十帋庭好 北多棗

一 高 十二尺 唐茶筥や

一 高臺寺蒔絵棗

一 是ハ濃茶筥や まぶすまかり

一 唐茶器ニいろくぬりものやぬきあいめん棗ニよりて
ぬくへし

茶碗之事

一 平茶碗ハ茶筅とほして入ル
茶筅すゝき茶せん通し大きつゝ上ルや
夏きひやかしきや楽焼にてハ水盤とてあるよし

一 筒茶碗　深付数　青磁数　ほか和物にもあり
唐ものハ古手堅筒や　是ハ夏ハ冬もちひるものや
内より始きてふちハ端にて始くや

一 天目ハ台に附きものや　されども其の茶台を川ちかひにまふこ
台となし薄茶濃茶共まふる利
但し平茶碗　筒茶碗も薄茶にまふる平茶碗
されどもある平とあり小始りをにハ濃茶にハ用ひべし
茶碗ハ内より立文有へし

一 天目ハ唐もの瀬戸の数ハ始くもんとのある之楽焼にても
写ものや

一 建盞天目 是ハおとゝも

一 井戸　熊川（コモがへ）　雲鶴　いらほ　高麗

朝鮮　ミバ井戸　唐津　萩

多くあり筑前の唐津ハ西極の上作と思へる窯といふ
是ハむかしある窯の人日本へ渡り唐津にて茶碗焼申候
其上作にて手ぎはよき（両ぶ比現得す）窯なれバ此作し奥高麗といふ

一　楽焼の祖師ハ長次郎といふ是ハ利休時代に茶碗を
京都聚楽の土にて茶碗作る故楽やきといふや其子二代
目長次郎其子の孫に吉左衛門といふ是をのんかうといふ長次郎
三代目長次郎をハ京中にて焼手のハつなとよべる也と記録

三代目長次郎と世上にて讃はのんかうといふとハ生れ付首長きゆへ名之
宗旦好のんかうといふ事ハ手にのみ入也手に宗入文弁左入一元ハ一入
の弟子や其子佐土朴弥名弥といふ聖水といふ是有り故
子長入其子ハ吉左衛

京都小路一条通西側住所住居之

一　茶碗師といふは是ハ御用窯にて御用之茶碗有所
しておりて手其窯のる也故にて初代茶碗斗扱の
惟照にかきり窯るより御用茶のるやおふ所を扱へ

但し茶碗に中ぐらゐの平茶碗のうちやうかれ拙く

茶筅通し平たき筒茶碗ハ極意平茶碗ハ黒

中とるべし

一 其外ハ少し平にあらて口の広き茶碗を用ゆべし

一 乾山仁清の無ぶり藤濃きふ座し唐茶茶碗濃茶

茶碗とても ゐ（お）あるへしされども おほく唐茶なる平生ハ唐茶にハ

おもしろし又しまし物つきりといひはし無事ハ濃茶にハあ

しくどちらにても水差茶入の大とやきものを揃へ有る

うけなし

一 志ほり茶巾に夏冬あり冬ハ茶碗へ茶筅通しのまゝ湯

一 志ぼ入志ぼり無る時の茶巾をささへきて無みそ合の縁の上を

通すも湯にて茶碗をあつくあに心にて手元二通まし拵て又

湯一ぱい茶碗へ茶筅通しするや又湯一ぱい入て其茶

巾とを無いこのまゝし其茶杓通しをすする見るもよろし

宗匠の時気によるへし

一 夏の志ほり茶巾ハ茶巾に水をもませて四方折にして

ぬれ居る茶巾を二つ上に置りや又釜の蓋のうへにて茶碗に
移り居る水を除し、すてゝ湯を投茶せん返しする也

一 天目茶碗にて濃茶出し、点かくさ濃るに不及添ておし候
流儀によるへし得意流ておすかといふかや

一 かき棕茶碗といふて他流に無し得意流にあるへし
茶の来るにあるへし

一 平にある茶碗は黒にてきるへし
茶杓之事

一 茶杓は古代象牙にて黒ぬりにてまふや是をぬり茶
杓といふ象牙の茶杓はおもきぬ 茶杓をいふ利休時
又は珠徳時代紹鴎時あり珠光迄は象牙或は竹にて
茶杓しや利休他竟にて竹の茶杓出来之事と落ち
文かは竹の茶杓ま割茶割ありて今是を見ゆ也
但し急迄茶杓の手ありは黒塗の茶杓象牙の茶杓也
又は細し なし

一 象牙茶杓は唐茶真茶を下に好き候する也あり

茶杓の始末にて茶杓をちりこもんはおりて茶碗のふち
にてしつらふにおくへし

○ 蓋置之事

一 火舎の始末を宝山といふ
是ハ棚に飾時ハ足ひとつむかふにすへし点する時ハ
横を上にして足をわきに置之（ある）本ハ一ツを柄杓の柄持
下に置へし

一 三ツ葉の始末ハ置ハ棚に飾る時ハ上葉の葉を前まへに
むかふへつかふにして飾るや点るときハ葉二ツの間に柄杓引へし
金の始末ハ飾時ハ上向へして飾へし又ずしめか上の葉二ツ
を先へしてちいさき方を上へして葉一ツの下へ柄杓引てよし

一 三ツ人形ハ飾時ハ唐人を向へ直し之羽織着たる人形
をむかふにして大き方へ柄杓引へし我より向ふ二人の上へ柄杓そろ
りとおろすへし

一 唐子形ハ文字書たる方を先へして飾るや柄杓引ときハ文字に
あたらぬへ引へし

一 隠家人ゟ人形をすへてむけて置 摘投ケ時も同前
釜の蓋を見時ゟ横に寝させて少し客付へゆるめて見へし
又鋺の如くことし直して投ケへし
一 さいハ文つむけて飾るや釜の蓋を見時にあとをむけて
よし 又釣まりにあとをむけてもよし
一 駅路ハ何の子細もなく縁の方へ投捨して投ふへし
一 夜ハ蒼ハ書籠や四角にして四寸にすミし角をけて
せふ飾る時ハ書直や

一 盤の蓋ハ唐金やかしらをあとにして飾るへし
ゆるめて摘投ケへし 其摘のあとへかしらをむける也
但し唐金ハ水にぬらさぬ次
一 口切投ハ書付の口切前にあしらひあてぬらし中ゟ平点
濃茶ハ是をよしとす
一 夜ハ茶上とあり 竹の芽ハ投のわき置
一 穂屋の香炉ハ先左の手に見右の手の平へ乗
のせて時々とりあつかふへし 肉へ摘投ケへし 仕舞

えのなかく飾るときハ傍やうけておくべし

○　釜の飾之事

一　大碗之　天碗之　志んちう之

みうき之　唐津之　踏もあり

蛙口碗　清の碗之　大碗とて但し大なる之

小碗とてちいさき之　さしげ碗之

歴代家遊好随くあるものや

○　棚之の事

一　紙張棚　是ハ利休の師紹鴎の好ミや

桧春慶ぬり四方ニ柱ありて天井板中板下ハ二枚袋戸あり金銀箔

張二枚鱗ニ形のや廻りハ多く緑の縁子ふてよりありつまミハ赤銅ニて

きくや点揃ニ伝あり

口伝点掛り踏ニ出

一　中棚ニ茶碗茶入飾ル

一　下棚ニ向テ右の方平水さし

向テ左の方　ぬくき　杓　建水　口伝

但し蓋ハ盤の如く置合よろし

水さしハ床へ何にても八寸位の高さ如くし

口伝 柄杓蓋置ハ左の方へ引ならへ置ハ客付へ置申也

但し如く蓋を飾たに置なり

口伝急撫里

一 柄一寸余り向ふへ左右の手にて取ルや否左の方の膝ちかくて蓋置柄杓取て先柄杓引置之左の膝ちかくて右の膝を引て平水さし一寸余り前へ押して而して其後柄杓を揃へ置之其後茶入

茶碗をへおろし大目点にする之口伝あるけるや点終て

又ふたを置中柄ハ茶碗茶入とそかさり置まさしも元の如くに直し入ル時ハ蓋置柄杓も如く置其左の方へ綱え仕舞候て後左右の手にて柄杓の通出しハ寄せて置之一切柄にて点する時茶碗茶巾茶筅

けし茶碗持へ持入ル右時ハ茶斗中柄に出ス中に飾ル之何れ柄にても目付なり

一 組踏板 上柄ハさしろき

花 香合 香炉に 香炉 出し 香合 羽箒

茶点しかはらぬものを飾ル之

一 桐袋棚利休好 此袋下手板ありて中の棚ハむかふて左方

高く右の方低くして勝手の方小香の器の寸法より此棚も大目点之

高き方柄杓蓋置を低き方ニ茶碗棗蓋置ハ柄杓の真中ニ

置文置ハ三ツ并右ニ置柄杓ハ柄ハ七八分かけし置之

我名ありハ大黒庵といふなれハ袋棚ニハ

釣ちをとめる利

紹鴎の弟也ト伝なし 公又ニおく

一 一籠宗易ハ柄杓緒并付ニ門より中品見ハ大きニ常

あるつなる利

御こ置専し柄杓门

茶入
茶碗 おろし大目点ニする

仕舞之柄杓も同様始おし無己と跡へ廻ス

五ツ臺子之事

一 高麗臺子之事

むかし高麗より利休ら中今ハ三茶棚仍し一寸張り用也

点様ハ四本柱の真台子同前　風呂ハ切合同也
手前何ニてもよろし

一　竹台子　珠光好
　　天井地板共白木ノ桐
　　四本柱竹　仍て竹台子といふ

此台子ハ土風呂入てよし　水指ハ右之方水こぼしの方柄杓立
前ニ置し　蓋置入テもよし　杓立ハ唐金青磁楽焼ニても
くるしからず

一　但し炉ニて点る時ハ水さし杓立ニ置し　蓋置おもしろき

蓋置を飾てもよし

一　及台子　二本柱や利休好
　　餝りハ竹台子と同様成べし

一　丸卓台子

一　四本柱ハ黒塗台子
右台子といふハ飾台子といふ　貴人拝見入し茶入茶碗を
取合よきまゝに飾り置や　此類ハ貴人ハ向掛物おきて茶を
点し出し一通りニて濃茶点しハ其わきにしかるべし　嗜置べき

あるひの点前を致にハ台子同して何の差別もなく濃茶
点し後ち薄茶点前ありと聞し事ゝ之
一 台子の飾方ハ古く点招長あり

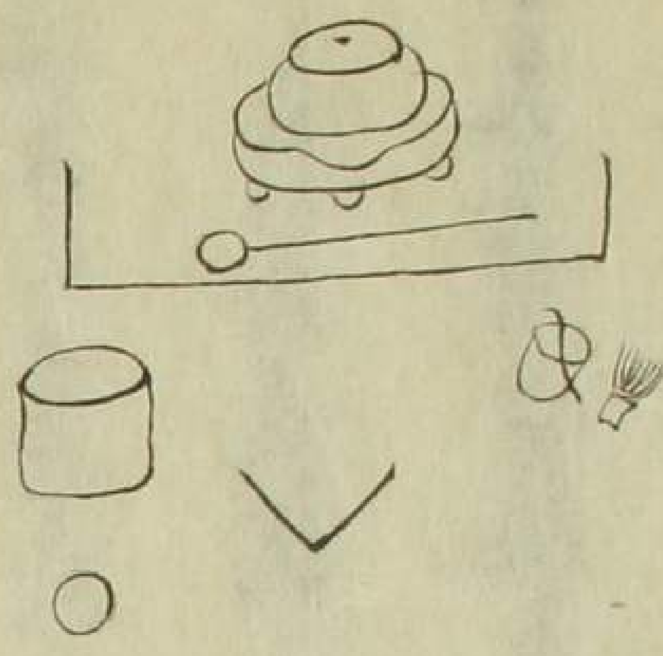
〇 長板之図

一 長板真黒塗　風炉ハ夏より冬迄の
長弐尺八寸九分
巾壱尺弐寸
厚サ六分半

多く好あり

一 一と通りの飾方ハ風炉と釜杓立に同しの内端に並べ
さしと飾方利休風炉長板の真を風炉のもうれに並べ
居ハ風炉のもうれを先之
一ツ並ハ元来洞子ある故台子好都し有るものや何ゝ
水指左の方洞子の内に水指を置ゝきしふを式違と
いふしは極老人の点前に利休相殺好たるよし
一 土風炉釜左の方水指左の方茶入茶碗に同し

始ニ置棚ハ左の方之棚板を引ハ風呂の前一文字にや



板始ニ置長板も飾ニ之ハ
風呂の左脇ニ置
左ノ手ニて柄杓を右ニ引ニかまる之
左の手ニて蓋置かまる之
柄杓あり肩ニ置合風呂ノ方
柄杓 蓋置 茶碗まへを飾る之

但し惣飾ハ風呂のちりれを長板の左中小置右中ハ右の置へし
杓立水指をかざるへし
二ツ置ハ同格にして右の方の左中に水指置へし

記ニ引置ハ右中に置へし

一 長板ニて濃茶之節ハ茶巾水指のまへを始きて置袋ハ板の左の方風呂の脇手前ニ向ふ

一 又臺子も濃茶の節ハ此通りにされ共袋ハ上棚の上脇手前の濁ニ置座を手前組手勝手

一 茶ニ茶入茶碗をおろし水指のまへニ置

二 たふしを右の手にてぬき長板の左の方に置五七寸もおしうけて置之

三
水建両手ニて取へおろし右の手ニて蓋置を卸し杓立の
前建水の前ニ置る所ニ置ニ準し例の所ニ置其外座の
通湯をくミ置 杓を右の手ニ取茶入茶巾の始末其外座の
通り仕舞置ハ茶巾の始末をして杓立へ杓を置 但し
湯こほしいろいろや少なし 杓立ニさし

茶入茶碗 持へ上る

水建引

炉ニて長板五ツ飾

火箸	水さし
杓立 茶入	茶碗

右ニ準し蓋置持出長板へ出向ニ飾り火箸
右の手ニて取左の手ニて持出し右の手ニて
長板の端より右の上へ置板ハ五六分もはなし
置之

風呂長板五ツ飾

火箸 茶	水さし
杓立 建水	風炉釜

右ハ前之茶入茶碗取りしまひ持出
左の板の上より置ニ直し其外遣ひなし

一

一 長板ニて茶道飾し置ハ茶杓水さしの前ニ飾り置之

炉風炉同様

四方棚之事

一 四方棚ハ利休好

是ハ四角之を後江岑宗左四方角を落し面取して好ム

併四方棚と利休より好之ハ古代の通角切ニ成方面取し有

世角切の四方棚角不切の四方棚といふ

上棚 茶入 茶わん　　又 茶入　　又 帛紗 香合

又 茶わん 帛紗　　又 棗　　又 茶入 茶碗 柄杓

下ハ 水さし 柄杓上ニ飾れと云ハ蛤ニ置 勝手付角ニ置 柄杓ハ

あとのけて是ハ其儘ニ置

一 棗斗飾り時ハ先ツ柄杓ニ而しハけ蛤ニ置ニ而しの後ニ置茶碗左の手ニてかりの所ニ置棗を上ヘ上ケ中央ニ而し

茶碗と引込之

又 柄杓蛤ニ置ニ而しと右の通り引込ミ

又 あて茶碗ありの所ニ置棗あけミ

茶わん引込ミ作法とあり

一 棗茶碗と飾りて先ツ棚ヘ右手にて右ゟ上ケニ水

建盞並柄杓と引違や

一 棗之柄杓之飾りハ先柄杓水建へかけ扨て並建水の
後ニ置棗ヲ上ケ柄杓ヲ上ケ茶杓ハ膝手也盞並右ニ手ニ取
棚ノ下勝手脇ニ置

一 茶入茶碗柄杓ヲ飾ルトキハ柄杓盞並水建ノ上ニ置候而
茶入ヲ上ヘ上ケ柄杓左ノ手ニ取棚ノ盞置ト棚へ並也
但し万一勝手違ひの事あらハ柄杓ハ勝手付の方へ
置へし右の儀棗ハ同事先へ立ニ勝手遣ひと

いふ事なりしと覚ハ数寄屋の小座敷ニ而座敷の
柄杓引ん仮有利

一 茶入茶碗柄杓を飾るときハ柄杓之通しの上ニ付茶
入茶碗おろし扨て並柄杓をうけ申候

一 棗斗飾る時ハ茶碗持出しの後並棗と茶碗
飾合せ水建持出し其外右の通

一 棗之柄杓の時ハ茶碗持出しの後ニ並棗茶碗飾り
同し持出し杓を置居右ニ取り扨て並之後茶一柄杓引

又右左の通

一 茶入茶碗飾りたる時ハ二ツ置し持出西方をおろし右ノ通也

一 香合羽箒飾りて炭仕舞て香合を左の手にてあけ羽箒右の手にて置かし羽箒すゑる也右おろし置候
ろし持出右の手にて羽箒ハ茶筅と共ニ又風炉との間に置
香合を床ニ置

一 碗羽箒と飾りて炭仕舞たる碗と蓋よりおろし置ニ
柄杓上ケ又ハ羽箒ニる蓋の上をとき左の手にて置也

仕舞右をおろしたるときハ先碗を左の手にて又茶筅
の手あけ置羽箒おろす也

一 茶筅飾りて仕舞候て持出候ハ茶筅を置すゑ仕舞炭仕
舞たる後ニ置く飾りハなし

一 杓蓋置飾りて炭仕舞左の手にて柄杓を引帰して置たるし
手にて置也
右おろしたる時ハ柄杓左の手にて右の手あけて蓋置ニ置
座ニ置柄杓引也

一 濃茶の時ハ袋上棚の隅ニ置茶巾ハ水指のふたニ置や
茶筅飾ハ茶杓上棚茶碗茶入飾るう又唐茶筅飾
らるゝ猶手前の方ニ飾るもよろし 水指の服紗前ニ置
てもよろし

一 濃茶のときハ初座 掛幅 香合　又花入らるらん　又花入らる

後座
茶入
又 唐茶入
又 杓掛ニ置

但し唐茶入飾らバ茶碗大ニよき取常のやうにすゝ茶入と飾

今もよろし

濃茶入ゟけりて後ニ柄蓋置飾るもよろし

丸高臺之事

一 丸高臺　桐木地　宗旦好

世上ニ丸棚といふ本法丸高臺と申ハ

上棚ニ 茶入

柄杓ハ横むけてむかふへかけて用之

茶碗

下ハ 水指のあと蓋置飾るや

上棚ニ 棗
　　　 茶杓

又 柄杓
　 ふくさ

羽箒 合ん 羽箒 重合 四方棚の事や

但し さからハ飾ふ申れ

又 棗斗

又 茶入
　 茶碗

点様ハ四方棚に同様之 但し 柄杓うつむけて置ク事之 雲足二ツ

ありしをお茶入 雲足 二ツ足をむかふへ 茶入風呂の茶 文叔宗旦風

呂とおもしろく風呂足をむかふへ 茶しめ川をまへに茶し

置るよし 其後ハ 風呂とあらため 足をむかふへ 足つきをおく

茶しつるよし 其に 皆茶や 世上におふく足二ツまへや 我らか

小板にて二ツまへや

一 茶入 茶碗 柄杓に 飾り置ハ 先柄杓をと 所ハ茶入 茶碗を

あしにて 上ケ 是をものにて 柄杓をうつむけにしてむかふへかけるや

茶巾 水さしの茶わんし 勝手の之

一 棗杓 飾りて 杓 何も 庵の事也

棗置て 杓 左の手にて 勝手の方へ 筋かへて うつむけ むかふへ

かけて置　○かれ

又棗を掛合せ入るゝもよし　其時ハ杓を右の手にて
引置左の手にて棗を置申候
一　杓蓋置の時ハ右の手にて杓をとりあけ中ゆひにかけて引左の手
にて蓋置を置く
一　棗の斗のときハ四方棚(柾)同様
一　茶碗茶入杓蓋置おく時ハ急ぐニ付(以)先之通り持出茶入
茶碗を棚の真ん中(に)おろし杓持出し座敷へ戻り蓋置をかけ杓引
へし置(丈)ハ右之通りや

一　茶入茶碗飾るときハ水建杓仕廻持出茶入茶碗おろして居
あと置ば置丈ハ右之通
一　棗摘杓飾(飾)る時ハ茶碗持出棗ニおろし棗を飾合ハ
同し持出摘杓を右杓引其外右之通
棚　筆筒之事
一　硯　筆筒　桐木地　材体　好
是ハ同ニ水さし中棚ニ茶入茶碗　勝手の方ニ摘杓をそらけて置
棚之置下ニ置合之同し斗持出硯箱の蓋ニのせて勝手の

きんの文へあけて並び戸の内ち掛にさし出してもよし
一 柄杓をかまし居しの上にかけ置て並之座敷の中柄
ある日茶入茶碗右にかまし茶筒の先へ並中柄ヨ川柄も茶筒の
勝手付茶筒の脇ニもたせかけ置なるに入並や其外の
通り
但し戸を立てしちて茶筒の左の方ニ立かけれ並常は
又仕柄中柄又茶入茶碗並あたりし中柄川柄も茶筒の先へニ並
為ひ上ちるもよし左右ハ茶筅茶入簞（草）笥（筒）の前へ中柄の

上ニ並之置を定（之）座ニかし
此式ハ恐るゝに付てわれの方にハ廿畳ひよりはされ仕舞（度）ハ
時ハ先杓を建水ニうけぬきと並を水遠のうしろにおきそまが
中柄をさし出し茶入茶碗をあげ柄杓を右の手にてうけ蓋
並ニ其下ニ並太の手にて戸の上柄左の手をあげらハ簞笥の
戸をさし出しの之
一 四斗飾ハ時ハ四方柄ニ同じ
此簞笥むろし 太閤様当京の御陣中入 村秋皆おひら

糸目ハ小田原風呂ニ似合まするよし　摘ハ指ニ寸封を付文
纏あニ纏をおろしはするもあり
小田原風呂といふハ松の図まするや世上ニ能風呂又ハ
松風呂杯といふものや

利休好の寸法

一 高サ八寸五分　一 摘一尺七分五分付
一 三足 壱尺但し横巾参分之　一 上の丸穴指渡し八寸二ア
一 前窓 高サ四分ニ三寸 六ア

一 惣ハ日向松ニて四方まするや内ニち〔土〕ヲ付塗込申し甚地紋也
といふ羽釜を透まてうけ之
一 地紋堂ハ今ハ小田原ニ而ニ手附右の堂ニ似合せ申ス釜
とかの風呂ニ似合せ申すものや
太閤様御好ひら釜ゟ霊丈分右の様箕篭も小田原風呂も似合ニ
きひら釜まするものや
右の風呂ハ雑箕篭似合せ面白きものや当世小田原風呂
極黒ニ用ひ面白きものや

右濃茶之事ハ右之飾ハ茶筒の上棚 勝手付ニ置へし
上棚に平棗之唐茶盞杯入置ける茶碗 段持出上棚の平棗と茶
碗と 組合従茶筒 中棚へ入置何も利

一 簞笥之上ニ 香合 羽箒 羽箒飾 きるへし
こふるへし 右輪花と連るへし

三重棚之事

一 三重棚 桐白木地 一閑張 宗全好 如心好

一 下棚ニ棗斗飾 四方棚同様

一 杓蓋置飾ニ而中棚ニても下棚ニても飾候や 四方棚ニ而お後
お後も四方棚ニ而あるへし

一 棗杓蓋置飾ニ而先杓柄ニ置を飾 其外茶碗ヲ振へ
あすふ在し
くりよせ棗向ケ中ニてもよろし 又蓋置ニ而属しの上ニ而け
て棗とかさり 其外杓蓋置かさりてもよろし

一 茶入茶碗 杓蓋置飾ニ而 杓柄ニ置を上の棚ニの其外
好ミと飾る

一 棗抄盞臺上の棚ニ飾時ハ 棚ニ茶碗飾りて抄盞ニ臺ニ而し
ニかけ茶碗飾り置ニ臺棗上の棚へ右の手ニてあけ夫ハ盞
臺右の手ニて上ケ捕抄を左の手ニてあけ茶碗をとりの棚へ
上ケ申候

一 棗斗飾りて置候ハヽ点かりし候ハ四方棚同様之

一 下の棚ニ棗上の棚ニ抄飾りて臺飾る時ハ点掛り茶碗
持出水さし之前ニ組合せ置し 持出抄盞臺四方棚ニ
同様なり

一 下の棚ニ茶入茶碗抄盞臺飾る時ハ点掛り候ハ
茶盞をおろし夫より捕抄盞臺をおろし申也

一 下の棚ニ茶碗上の棚ニ棗ニ臺抄飾り置し時ハ
点掛り候茶碗をかりの前ニ臺棗と組合せ右の手ニて
盞臺を持居右ニ付抄引夫より盞臺の通り

江岑棚之事

一 江岑棚ハ江岑宗左の好や白木桐ニて四本柱上ニ
引出しあり

引おしは同し茶入・茶杓ふくさ大三ツ飾之

又 茶入斗　又茶杓斗　又ふくさ斗

上ニ 茶碗茶入 引おしへ茶杓入てや

但 引おしふくさ斗入て 茶杓引おしへ帛中ニ置も よろし

上ニ 茶碗

引おしへ茶杓ふくさ

但一文字にても二文字にても三文字にても

上ニ 杓 蓋置

引おしへ茶杓斗

又 棗斗

又 ふくさ斗

但ニ 三文 一所にてもよし

又 二文 一所にてもよし

上ニ 棗 引おしへ茶台

茶碗棗ニ上へかけ利休時四方棚同前文引おしへ茶杓入候て

杓蓋置ニ候し引無用 上への世る時

引おし 右の手にて引おし 茶杓茶巾入ル

但 ふくさも入候て茶杓茶巾へよ世候ふくさ 勝手付茶杓の

脇へ置 茶巾ニ添て ふくさ入蓋置之引おしさし候て無用

上ニ 上ル

引おしへ茶入 入候へ茶碗 備の社引おしへ茶入置て

茶碗勝手へ引

又茶杓斗引おろしへ入候ニ而も杓引出る茶杓とも引
おろし入茶碗引出しや

一 ぬくき斗引出し入れて棗を引出し帛紗引出して
多しみて入るや

一 茶入茶杓ぬくき引おろし入れてニ而も杓引出る茶碗
後の角ニ置引おろして棗を入替手前の方へ茶杓をなして
ぬくき茶杓の柄ニ付申候る引おろしとも手やまの茶
碗引出也

一 上ハ茶碗引おろして棗茶杓ぬくき入れて茶碗後の角ニ置
引おろし棗茶杓ぬくき入れて茶碗上へあける
但し棗斗ニても茶杓斗ニても茶碗後の角ニ置て引出して
入すへし
茶杓ぬくきハ其事の通りに飾付引出て帛紗引おろし入れてよろし

一 上へ棗斗引出し茶杓入れて茶碗後の角ニ置棗を上へ
上ケ実か茶杓を引出して入れ之実か茶碗引出
大体右の心得ある通し

一濃茶之時ハ引切ニ而濃茶茶入を入置ちろまき上ニ小帛紗茶
入を飾引出し候ハ茶入を入置もよろし包帛紗茶碗ハ引
出し茶入も置合し袋ハ引出し茶入之座ハ手前座の通

一引出し何も茶入

上ハ　一茶入　茶巾
一柄杓　建水
一蓋置

上ハ香合　さらし
帛紗もよろし
一香合　帛紗
一ちりれん　帛紗

下ハ座飾花もよろし

一建水引出し時ハ茶碗かりの蓋置建水出し引出し中をさし
て茶碗と組合とや

一茶杓引出し小有ハ茶入茶入茶碗水次の上へ飾付引
出しハ茶杓出し茶巾にかけ一寸ほ

一帛紗挟引出し蓋置時ハ柄杓水指ニ引出しかい茶巾出
しさけ一寸ほ

一建水茶杓時ハ引出し合建水を出し水次の上座ニ置
茶入出し茶巾ニかけ引出しさして建水茶碗と組合以之

一 棗茶杓ねくさゝ出し時ハ先ねくさをさけ其の棗茶杓
ともに出す様ニ致す之
古江岑ハ柄杓ハ江岑宗左紀州ニ於る御茶道役被申付
る後茶道小座敷ニ而能濃茶の眉経柄杓好ニ而仍しか
すハよせ来ニて香炉の経柄杓出し入蓋置ニ用ゆ前の所へ置き
羽なれハとて茶ニ用ひよ申ハ不給物よし其外あつ出来や
もの用つつハ宗旦ニ而も遥り申れる事ニ伝来や風流のと
のや

棗小卓之事

一 棗の小卓ハ仙叟好之黒柱有りて下ニ置のせまき棚あり
上ニ水さしをのせ下ニ置せまき所へ建水ねさゝ置と入れ上ニ
茶入茶碗杓なと置柄飾りをも之又勝手付柱ニ柄杓かつ
むけて立かけて置あり又代ニ置ものら和んまき遠の人ある也かなと

一 上ニ茶入斗
上ニ 茶入 茶碗
下ニ 水建 蓋置
柱ニ柄杓かけ置 又 蓋置斗

一 上ニ 茶入 柄杓
下ニ ねさゝ置

一 上ハ何もなし 柄杓立計 下ハ蓋置

一 上ニ 婦る置 柄杓 上之 香斗なら 四方棚ニ同様

一 上ニ 茶入 茶碗 柄杓計ハ柄杓を水建の上へかけてまわ

茶入茶碗を上柄杓を左の手ニて横手ノ置か柄へ付 手にて柄杓

のこふをあとのけ なれも外四方棚同様 蓋置ハ棚の下へ

置ニ扉し 柄杓ニ扉し の内へ入 元の座ニいて置之

一 下の棚ニ 置ニ扉し 茶ニ時ハ両手ニて二扉し をおへ 右の手ニて

棚の水さし外おゐへ移し置かりニ置ニ扉し 茶の座ニ置 柄杓左之

手ニて元の如く指直し 座おニ付 蓋置座ニ置 柄杓ハ

又ニ扉し 右ノ手ニて横手のすく押おし かし棚かおくるハ左の

手ニて元の如く両手ニておへ元蓋置水さしのおニ 仮置して立か

杓を左の手ニて指直し 御置座ニ直し 杓ハかれるもの

大体の式ハ是る座ニよりて心得へし

但し濃茶ニ用ひても是る座ニよりて心得へし

目録

一 高麗卓
一 一重棚
一 棚物一体ニ飾之事
一 釜並寸法
一 曲之扇之事
一 香合之事
一 炭家不用之事
一 風呂灰三段之事
一 二重棚
一 洞庫之事
一 茶巾寸法
一 火箸寸法
一 袋扱之事
一 家不茶不用之事
一 雲龍風呂 鳳凰風呂 灰之事
一 炉炭灰三段之事

一 炭点ヶ条之事
一 茶とひ点之事
一 南坊茶入荘り之事
一 独点之事
一 会席座敷次第之事

一 炭手前十二ヶ条之事
一 炉切様之事
一 不審茶入次第之事
一 茶入荘りして 是ハ台 茶碗ハてんもく次第之事
一 どら打様之事

高麗卓之事

一 高麗卓ハ一閑張ニ文吉ゟ思ひ付高麗卓ト申候所ニ別
有る[illegible]之略ニ好之
点様ハ四方棚ニ置合之
又濃茶ニをひての時も同断

二重釣棚之事

一 二重釣棚ハ四畳半以下の座敷ニ用ル棚之
上棚ニ壺 下棚ニ柄杓建置也

又香炉
上棚ニ茶入
下棚ニ香合 羽箒
又 ふくさ 羽箒
又杓 蓋置
又杓 蓋置
三重棚よりの飾 一重目之袋茶入時ハ 柄杓を添て棚の下
勝手附方ニ置之 濃茶の時ハ
後入 濃茶器水さし脇へおろし
下棚ニ薄茶入ゝ
柄杓
又蓋置ゝ
初入 下棚ニ濃茶器
又初入上棚ニ香炉
下棚ニ羽箒 香合

又
後入下棚ニ茶入斗
初入下棚ニ濃茶入
下棚ニ薄茶入
勝手附ニ杓
後入濃茶入水さし脇ニおく
水さし脇ニ蓋置を置
又初入下棚ニ濃茶入
後入水さし脇ニおく
後入下棚ニ杓
蓋置
一重釣棚之事
一 香合 羽箒
一 ふくさ 羽箒
一 杓 蓋置
一 壺 蓋置 柄杓
一 壺斗
一 香合斗 羽箒 柄ニかける

柱にかくして柱に羽箒うけ可也
流儀の書ハ二重棚によりて飾合せ可也
花いけし棚にかくしは棚同様
一 二重棚ならバ下棚に何ほども備らん様よろし
一 掛物の
一 香合 棚に飾ル
一 羽箒 柱にかける 又香合に並合
花を三ッ飾ものむねつくる之組飾にん様ありて屏風のあらバ
羽箒をうけ下棚に並又香合なども掛物のによりて参合可し

ん様し座し横床のあらバ羽箒をうけ可也

洞子の事

一 花ハ裏千家に宝方文隠の飾あり文隠と中も宗旦の隠居ハ表千家左方之主より文隠ねといふる之事文隠の教書座にましれ寸法ハ次に出す
一 洞子ハ飾さし宗とて板の座ぎまで開きいれし有る戸ありて手前さして添しらて手前右の洞子を取出しあり文略す
満たるハ手前勝手とんびんて上客側て茶花飾を見るべし

晦す晦日すき之未在の家近内を入て戸をさし置て之家ハ
ん取ハおふおく
一洞子の中ふ棚あり羽箒中ふ釘を羽箒の釘爪掛かけ置く
始ゝ置を直置し
又釘ふ羽箒かけて棚ふ香合飾りてもよし
一袖入上棚ふ置也　下 取ろく
又上 まん中 茶入　下 家具 茶筅 持具 取ろく
又上 香合　釘 羽箒かける

又上 香合　下 茶わし
羽箒
後入上棚 茶入　下 蓋置
水さしの座ふ水さし斗
又上 茶碗　下 茶わし
水さし持おふ茶入置　釘 掛物置ありても
又上 茶入　下 水さし　釘 掛物置ありても
一水さしかさり洞子の内ふ茶入置時ハ茶碗持おハ下ふ置
洞子あけて茶入を出し茶碗と茶巾ハ常の通
一水さしのおふ茶入置て洞子の内ふ掛物置き時ハ

茶碗持出組合常の通ニ而持出洞子あけ先柄杓ニて
湯汲しかりの座ニ直り水指をとり始て直ニ大風呂の後
ニ直り洞子さす夫より常の通
一洞子の内茶入なさしおかず茶碗持出洞子あけなさしかり
ニ直りくと持出し座ニ直り夫ニ茶入なさし此後直り茶碗と
組合洞子をさす夫ニ常の通
一茶籠ほうろく洞子にある時ハ洞子あけ茶器かりニ而
おし座ニ直り土風炉しもかりの座ニ直り洞子さす夫より常の

通之
但し上掛茶入ハ下ニ置ほうろく有し此も同断
一香合羽箒洞子の内ニろく有時ハ茶器持出ほうろく持
おかりの座ニ直り洞子をあけ羽箒茶器と炉風呂の置ニ
直り香合かりの座ニ直り洞子さし香合持て座ニ出り香合
其の座ニ直り夫より其の通
一 但し羽箒釘ニある時も同断
一袖入茶入上ニあり　下ニ茶器斗も飾

仕様ハ茶筅かさり飾合なと同様之

又後入ハ上ニ茶入茶碗と　膳合下ニ水さし　柄杓ふた置

右ノ様ニかさりおかし　其時ハ出居し　半掛蓋置左の水さし

をかりの左ニ置常座ニ出し　是より茶碗かりの座ニおし

茶入水さしの前ニ置　茶きん組合杓を左ニ居し　ふりけ蓋置

置出居しの後ニ置洞子をさしてふた置座ニ置柄杓

をもよし　又一嘉ニ杓を出居しふりけふた置ハ二居しの

後ニ置水さし茶入茶碗と　膳合其もよろし　杓のお後ハ

いつまでにてもよろし

又後入茶入茶杓を上棚ニ置

水さしハ洞子の内ニ有る元常座ニ有る元何指居ニ

いつしそてよろし　其時茶碗指居かりニ置洞子あけ

茶入おかし茶杓茶碗へかけて組合之

濃茶すミて後台引過水さしハ洞子ニ入戸をさし炭次居

其上ん菓子をおし　まへ水次指出水さしニ水張て茶碗

使ひ掛物洞庫の内へ出し置てつめ台茶入と茶碗と建水並
戸をさし能時分に建水斗持出台茶点る也
一　平生台茶の時ハ茶入に申候ハ皆に備ふる事也
一　茶桶箱袖斎備なし是ハ口伝有之上棚に茶杓に
並内ハ台茶入濃茶入と建水入る袖庇にあるさつあり茶
桶箱ハ飾る後ハ何率指尺仕候とや是時亭主最りと
申並る濃茶と台茶をの事に置候而後茶桶飾りし
見ん事ハ何の子細なし　されとも箱に申付あるを飾る事也

此外多くあらひあり茶桶袋を飾るの大口伝也
一　守日庵二畳大目に而洞庫あり是ハ大目切之上の
棚三尺三寸五分に八寸の袋のこ之戸ハ杉板二枚之引戸方
なり寸法委しく是も又隠乃数寄屋にある洞庫と同様
加して出すに宗旦の隠居之此庵ハ七十以上之人に出す之
若年の人ハ老いぬるもの之されとも常に稽古有之人ハ表
之ちハ茶に用ひらるへし　平生に易皮を隠しかいふ
昔平生台茶点前ハかくもなし候

一 上之座ハ立居し　押込ニ常なる勝手付の方あけ置へし
洞水東中の洞の事へあけ申候
一 右座之座ハ頭ニかこの方の袋戸をあけ置て菓子をも入れ
是ハ小宴席の茶之席と相承し　其外下夕の方の袋戸あ
けて炉之上柄杓置へし　例の通ニ向けて茶器置之
仕舞ふ時ハ先柄杓を取の下へ柄をむけて引炉之上左
の手ニて押き合スヘ之

棚類ニ　香の図棚　紹鴎水指棚

冠棚　宗甫棚

一 右此絵流ニ茶ヘ棚あり皆小棚ニて四角棚ニ
ねらふ大棚杓立也しるの喉先四本柱の棚ニ用ニ処し

一 杓立ニ柄杓火箸を添へて置事有
柄杓の柄を火箸二本の間へ挟ミ持出して上置し　立ル時ハ
其一火箸を勝手附の方ニ建水の世てよりし火箸ハ多く
あとしれ之
但 杓立口の広きものハ杓立土器ニ立火箸ハ左の方付く

袱さも立置之是も大躰ニて上ノ下柄杓の柄の觸らぬ

様ニ折立へさし置座し

棚ともの一躰しんに飾る事

一 水さし入茶点仕舞て水指ニ茶巾を添持出水指をさし

一ヶ所ハ茶巾にて水さしの小口又棚のおゝりまても水指際ゟらて ふきて

茶巾水指の上ニ置持所座し

一 長板の外何ニても水さし出し水さし申す

併し水さし并茶碗置之候し邪魔ニ成りまりし先始て置

水こし入おろし丈ケ水さしおろし一ヶ所ハ水さし棚へあけて後

始く置を棚へあけて申す

一 丸臺子

一 桐袋棚

一 紹鷗棚

一 長板

右ゟ数大棚ともの小ヤ分八寸揚て置申す

一 小棚ともの数何ニても其置の真中ニ置座し

一 茶碗棚へ飾らし茶筅ニ茶杓後よく茶碗を始まて茶巾

壱盛り毎ニ立ましくて茶碗飾申す

一 棗飾りて棗の内よく改茶をくみくるり又棗の内よこれ
らりて飾申間敷候

一 茶碗もよごれ茶巾もよごれなど飾申間敷候

一 柄杓飾りて湯かへしして飾可申候

杓飾りて湯を釜へ返し飾る之茶碗斗ハ飾るもなし

一 古風飾りて指引てのちよく古風の中を拭きて拭き置を
入飾可申候

一 水さし先拭き又拭り拭きかくし様何にてもとくと拭き切

唐金水さしと同様に飾可申候

一 小棚をのちらて柄杓ハ次第節遣へて置べし

一 かざりの釜のハ香合何にてもかざらをあへむけ可申候

一 釜を置ハ何にても足三ツあるものハ一ツを前に置可申候

但しおとくハ是をつむらニ飾可申候

一 茶入茶碗飾りて置上ケ候てりて茶碗おりに拭き茶入座ニ出し
茶碗組合之又おろし置ニ而候手に而おろし候てりて茶碗かりの座ニ
置棗ハ棚之の上の座ハ置茶碗飾合ス置べし

一　何ニても床飾と床飾の器ニ香の香の取合ニ無急し

一　柄杓の水さしニ水八分目入ル事ハ事

一　羽箒ハいつにても何板ニても客付ニ飾之

茶巾寸法之事

一　茶巾寸法達人巾壱尺五寸程ニ織立指渡し五寸ニよろし

是ハ四寸か五寸迄の内ニてよろし
五寸ニてはしきかり四寸も
みしかくてはしきされとも流義ニ

より四寸ニ切るもあり五寸ニ切もあり

六寸四方　織ア　　七寸四方　利休

五寸四方　古法

是ハ当時用ひ常は仕様又ハ用ひ候事もあり又茶の人の
気合ニ而寸法用ひ候てもよし

釜置之寸法之事

一　利休形蓋の唐金　作し　釜蓋といふハあしく
指渡し五寸　縁の内指渡し一寸三ア

一 桐の釜蓋 厚八分 四方あつさ四厘
角のめん壱寸弐厘 中穴指渡し 一寸四分
火箸寸法之事
一 利休好
炉火箸 桑柄 角にめん有 柄にむつかりさ割有
とめ之
柄長さ四寸三分 又四分 鐶の長さ四寸弐三厘 惣長さ
八寸六七分ほと之 但 柄数寄次第也
一 利休好
風炉の火箸 長さ九寸三厘 半鐶

一 かなり火箸 利休形以 宗匠方伝来
其寄なりきし 庸並の長さ同断
此外色々好之 葉の実鐶 茄子鐶
志い鐶 鳥鐶 菊鐶 龍鐶
是等ハ壱尺八分か壱尺壱寸も有之

曲出候事

一 曲をのかして とぢ目あり候迄見合 是かもよろし 茶碗入帰候
とぢ目前へむけ 持出ス時ハとぢ目 持手身ニ添ル
一 指物を置ハとぢ目前身ニ指物ル様ニ
一 殊の後畳ニ置てとぢ目客身ニ致すへし
但し外ニ左さしも有へし

庭畳 畳数 極之事

一 畳さし 表さし 裏さしといふ事 是床の内畳ニ畳ハさし表
前ニ畳ハ後々畳まれハ惣身さし表畳ハ前ニさし表畳之

床畳　前畳　台目畳

踏込畳　中畳　又炉畳とも

一 四畳半の座敷といふものハ 大目畳 二畳敷なるものへ
炉もむかふへつめて切之向三寸七分半の小板入候し 其ハ松ヲもて
目あり

一 二畳の中板入之の内といふ 宗旦好之是ハ皮体広ニ好と申ハ極ニ有之
縁を廣く入りも茶碗出しにも此方ニ置しにも此板の上ニ置 板ハ長さ七寸

あり来之洞房あると 数寄あるへし

一　此床脇二重棚の切は錦手かけ紙二枚にして手わけ紙をはらず
其下棚一重にて三枚棚の一番に板中には亭主の持棚の上に居り
茶を点前を台に別に茶入之錦手に据ありてかけ紙をはらず
中棚も上の方一枚のかけ紙あけて座敷を見出しに見るあり向棚亭主
茶碗は左の方は左の手にておし右の方は右の手にて押し 利休好なり
此床脇付棚なし 脇すり板とてかしりの際に松一本あり数寄
屋へ入時其相松にて植をすり流ズリ釘はおしまし松にて茶

入の道具にある之

一　那山形とて飯椀の形の棚なり 手水鉢あり 其上写真多く置は
結び数之

一　鶴羽の形まとしたる此床脇付棚なんとんのいろは写なりし近衛 造

是床脇付棚とくにしたるあり写をの其上に多し

香合之事

一　ぬりもの香合の類にして香をあるもその姫も鮑の紹鴎好

同じ大坂ぬりにして梅鉢の唐結なは利休好

同筆の唐絵ある時ハ於唐好
同あけざる墨絵ハ蒔絵ふし 在唐好
白ふ墨ぬりなしに 利休好
一 閑張三ヶ月文 以中形 宗旦好
一 川物海ぬり 江岑 宗左好
一 輪 書院ハ床の方指の方ふしてぬるを見おつくふ座し飾
中ハ時ハ床の方床脇ふむけて飾之
一 堆朱 堆黒 唐物 蹊趾 古京数 楽焼数

一 書院床ハ見きりと床之ありて大きなる花入掛ゆるく
飾おきり置ハあしく何ほども置しかれハ
客ふ花所望スル事
一 花ハ後ふ花生うけて並枝花臺ふ花二三種花入小刀
添て床の袖縁ふおいて客掛けて亭主出て鋏手口ふ置
花ふ入とも皆入ともに掛て亭主スル之事いつれも一礼スル也亭
主も袖座ふ出て亭主スル事之袖座一礼して花臺花入の
下ふ並花二種程継入ルる当一之頭もき置し以ふしてのくが

よくは家々に流儀ありて花入にもよろしき程
へるは之流儀家元家にハ亭主の心得ありて花生に宜しと流義あり
凡ハ何国も入るとハ花を入ても流儀にかかはらず程能よろしくと申伝ふ
あるまじき程ありて茶湯に気付し茶好きの茶巾など いつれも懐中
しては茶目の花入の形を定めて右の茶巾取出し掛ける
すると よしむ亭主もとくと拝見し 初座の客へ出すハ二番
目の客より亭主の様を拝見して花器のごとく受取て拝見すると
毎びに挨拶して亭主ハ花を一瓶して客へ挨拶して立座

引客ハいつまでも花生のまへよりていつまでも拝見する事 客の心得て亭
主茶碗を持参茶点る事也 客いつまでも拝見花生は客花生の
そばへより花を上ケ座の中に出て拝見又手水鉢の辺に拝とふ
石の上に如此花上ケて拝見する事 花生ハ何にても亭主の想数寄之
事なり 茶席の花生に花なきハよろしからぬと申及ぶ也ハ
無くとしてあぶなし 花入ぐるぐる又形も不揃れ無事あし
二重切花生都して花は又種類都し 客へ花不宜しくは客より亭主へ
尋ねて亭主は花を少生ずることよろし

スキヤにて床釜ハきらりの釣船花入釣るあり床の上に
くさりの留りに環あり花を入るゝにして其に付用八分
にかけてさげ花の清るにてかゝりして六むびて床し
うけの打釘へうけ居し 其のさまにて釣おろし置るゝハ
あしく

おし通にん段居し

一 床の天井に 轆轤打るゝハ 日坂にもあしくるゝされとも大きに
あしくとかく床しうけの打釘か釣居し

炭客に所望しする

一 花入置をおろしん於之薬桶附にして後の炭の時亭主釜
あけて羽箒にて其ま上客へ一礼ありて上座へ出り炭をする
ん勝ハ灰もの〳〵も下火出るも ん勝ありて下火のそこ灰抜に出して
下火を用ひて炭次之次第て羽箒にて大き芝薬掃るべく
時より亭主出て一礼して炭斗之趣をも其
見合はる 炭次上客炭して釜をかけやと存申はる
外の客に亭主先手俵此座と段と拝見おし通に候事

スル事之

一 屋形乗物ハ簾を上させ申事なき時ハ簾を下ろし毎
指出候迄屋まて巻上ケ置事もあり其上ケ候也事あり

一 屋形乗物ハ猶以袖より乗物ハ惣ニ屋形を置にて常の葉簾ニても御時依意好ある事よろし

雲形金風呂屋にする事

并
鳳凰風呂屋にする事

一 雲形風呂ハかき上ケ屋ニして四角の物ニしてお尾も入之流

第弐流の屋之

一 鳳凰風呂ハ黄からくり彩色がん入之鳳凰高台ニあり屋の仕様ハ
右一文字ニしてきり屋ニかかり無る事なし流葉弐流ニ用ル

屋之三段の仕様の事

一 夜の天井風呂の袖めハ陸台屋をくるくる黒川もし右簾身一
のる事之あかりをけも立事ハ

一 極黒ニ成中ニて○土太窓二枚立て屋もよ高ル入而○土太窓の見へぬ様
ニ屋を立陸台の見へぬ様ニあつく屋をも庇し二枚○土太窓と云

一 朽口風炉の名称ニ拠りて土竈一枚之白土の山灰よせかけして
高く風炉の底まて灰をよせかけ入て中ハ土竈の前ハ夏元身の
廻り際も土竈を前一さいりて中ハ火をよせかけ入釜もよく沸中ハ
様ニ仕置へし
但し極黒ハ釜も小さきをとうけ又遠来釜なと火気の
それぬをよしとす風炉の元起りハ風炉釜元合壱一く
極黒ハ元合ハかくあしくとも火気の見へぬを壱一とりけれ
朽口風炉の名称ハ夏風炉の元身同形名古志風炉大釜なと
うけ中ハ風炉のもしまりハ際も足つゐるよろし

炉三段灰の仕様之事

一 口切の時分炉灰すくなく土竈四方のすきも広くあけ寸
中ハ釜ハ小さくり自在中なとにて鎖揃しらるよろしごとく
又て灰をすくなくて釜なとよくかかり中ハとめるを之
一 雪中寒気の時分ハ底を深くして灰も多くよく土竈埋
多くと入中ハいつれも大釜をうけ炭も多用捌とかかり
中ハ様ニ丁段ら釜も底口の釜大釜よろし 此炉かき炉

あと面白し

一 昔ハ釣りかけ炉の底灰をあさくして四角も世まくおけ
灰ぼ出して釜も小釜かけ申されす 今ハ釜まて炉ふち遠ふ
あとかけやれ申すよく候し

併し昔先炉風呂定りてなく時代の炉ハ畳さぎ板とて炉
畳を致し申されおくさき日ハ風呂にも致し 又風呂を
やめて炉をも致し候之由 世風呂乾時き乾板の上ニ風呂を
直し申すハあしくや 主り風呂の道具ニ風呂を出し遣へし

釜構の法も此例よろし
炉炭を置く黒燼ニ事

一 四角
一 十文字
一 志もく
一 乱し
一 鱗形
一 土佐ちらし
一 瓦凍うた
二 瓦ちらし
一 角くづし
一 かきつばた
一 くづ流り
一 九三

一 掃立

一 丸並ひ

一 細炭落し

一 切て置切炭

一 割炭これにかける

一 寒気の小炭

一 暖気の大炭

一 座入条炭

一 後炭かきき

右九ヶ条ハ炭するに焼ふ事

蓋古来の法や

炭手前十二ヶ条し事

一 たきもの之称の事

風炉の時ハ 白檀 清丁 沈香

炉 ねり香たれ

いつれも香炉へ焼香をいたし称に及ふ所称に続ス座し

伴し清丁ハ炭にて火気ニ乗ハ皆手にて火気中れ風炉の上

よりたらしと二度三度ほと炭の上へ焼分け申れ自然

燃く匂ふもあり文後に匂ふもある座し 年生ハ一ツハ炭の本

一ツハ炭のもとに置座し 寒お政ル業の時ハ右し称に三流ス

いつし風呂中を去一尺ところ置る時にも炭の仕様香の
急様も流るゝを香一と置へし
一 炉の灰きる物ハ炭の添によりれ火のきハ手遠にほめくべ
かしくべ事ハ先ハ火をしかしてくべ中ハ火を〆し横に縦ぬ様に
灰きる物くべ事 灰きる物無世九ど 灰る先ハあしく

炭のいらひ様之事

一 炭をいらふにむさと火箸を茶筅へ入て此の炭から此の炭からと
まいらうの内にてかきまはす様に致す数からまいらうへも自分炭を

継茶明炭ハかしらにあり急炭ハたくすありせん茶之致至
火の様様を見考て五丈付らて無事も炭をとる炉中又風
呂へも入る事
但し火箸にてとくと置さそふ炭のかしらの才をあげ
炉へ入火箸をもかしらを立ぬきて置へし

灰まき様之事

一 炉灰杓子ハかろくかろくに添へ持出火先ハかろくかろくとあめり
ある灰をとくに入るつ物と まき事ハる杓子のさきなり

申候炉の中なと迄手をとゝけ炉ぶちへ灰のちらぬ様に輪
にまく座し又右へ廻て向ふ様に手を少くまく座し
下次におかんかふで灰をもよくなくまき四角へおりにまきて
よし杓子を掃きやれば向ふへ盛るしく杓子より先座り候しは
んぬるのし

羽箒の掃様之事

一 おやゆび人さしゆびにて持杓子柄又柄先ちと
まき仕舞ふ所の縁へちらぬ様ゆる心を持候ふし

炉辺掃き様

一 炉縁を箒の通りは白錦へまあるとてもそくる
おり羽右なかくはらりのけぬ様にしてなき又釜かけて後
ふれも釜へもおらりのからぬ様輪に手をやく掃は之
又右掃の道具茶杓との上をうらて水さし其上置其上
水さしのもとより茶入を掃のけて掃をもくふとをよろし
何右共おなれ共客の方へはらりけぬ様にたく
座し

座しきの事

一座しきの事ハ平生ニ心得有之候 わろき先ツ手前ニて
持出候も悪ニ存り候帯をわニて退き支より掃除之自身
川右ハゑくハ縁返の心得之表おの行気崩れぬ様の
わろくなと乱ニなりぬ様ニ縁まて返き可申候幕帯ニ
手の座くハごけニむらふニ退両手ニて正く返き幕帯乱て
正く座し膝をたて入ても幕帯の音高しくなく少きし
なくわさりのからぬを肝要と候之

手前おわれぬ様之事

一先火をしの持様の手ニしく火をし此場ニを持火器
をとて手前のおわれぬ様ニ心得可申候ゑ可前きまのなくハ
も下火迄しけもとき心得肝要之

下出の心得様之事

一下火ハ何の実もせず手つよくむらふの吉くいにおき可申候
其上ヘ又よせおくもむらふざおニ両手ニ退座し明炭ニと
ゑくふりし火をしニてはききぐきむらふニよせ可申候

又末々の上炭を置て火の注きまるに手をつかへして
置直し但し炭いらハ脇に取りて火の邪魔になるら
ぬ様ニ行よせ申候炭ある時分ある様に火の心によする
義なり仍し細か[illegible]様ありて行よせ申候なり

胴炭置様之事

一 胴炭ハ右の手ニて坐ニ炉へ入置し又火ぞし出てきさ
みたの手を火でし[illegible]入れてもよろし 胴炭ハ原へ掲を
後付せ申候なり 其一文字を炉ニハ焼ニ寄付候とも

勝手付入[illegible]ゆゑ[illegible]申候事

但し風炉ニて八ツ一文字之

次炭入様之事

一 次ニ小炭を合ん次第あり 其上ハ胴炭其下胴の右手ニそれ
手ニ細炭を掛置小間炭あるを次よろしく入置申候事
其外入申候も此炭の次ニハ枝を入て其次ニハ枝炭を
入れ其ある所よく見合て炭の面白く候ゆへを以て事之

細炭置様之事

一 細炭笈炭の事之炭を入る如し下とゝふて焼ふ
半之手附ふと細炭ちて縁をつちまゝ事れる也又細のゟ
夜のうちへもさゝ只おしたれのさへ本を並ゝんとる之

点炭之事

一 点炭ハ何もうも合好ちて入る之先ハ炭のとめ或ハ枝〆根
ゟとく合座し炭の挿框よく入也る故点炭も挿框
と高く手盆をとしめ中ゟ見る並不ふきハありゟし
但し枝炭ハ炭縁りの留めゟくいつれも炭の見ふ公てよろし

点炭ハ仕舞ニ並之筋下火気くなくふて枝炭
斗浜山ふ入中座し手附ハわりろく挿内枝
炭斗 浜山ゑ入ても置中ハ事

右十二条ハ皆口文之炭一通りハ夜の因よりち可ず炭
ふれむ晴ゟ偏しきる之能く手訓されて不言炭楷く
ふれくんうけ調練も座し炭下火分炭気のよく上る
柱ふ炭縁りとんれて並炭とし縁の中枝ふて並二行ゟ
三行或ハ而くふて炭れ並るの大嬉能く下枝ちとゝる

一 炭入 炭斗共 炭瓦共 菓籠共
冬ハ格く底厚く大振りにてよき姫のまゝよし
トス 夏ハさらく小座杓よし トス 秋物の方も同目
又新物好ミも宜し

一 香合 冬ハぬり物よろし 焼物もよろし
夏ハ焼物大きなるよろし ぬり物もよろし
ちやうび点之事

一 ちやうびハ先居合何ニても役座に於き茶師第二事
茶師身るハおし候し 二ツ目ハちやうびを点ると
いふ候し瓶との方と書ふとよしと
炉切指之事

一 四畳半切 是を四半先切といふ
付切指の茶道ニ瓶との数書ふ宜し
但し ぬり緒ちを用炉分上四半切
一 小四半先切 大目切と世上ニいふ

釣棚あり其座敷ニハ棚とものハなくて中柱ニかけくれとの之
炉ハ上段中央之例なさしハ其中ニかわるべし

一 向切 角炉ともいふて向板をいれずニ切たるを
又向板入たる炉ともいふてあるくある也

たり侍多と俗の人多く物数寄なとの之
是等ハ風呂と同様ニ炉にさしをかへしてきふなり

同
花家持来し事

一 細茶碗も川出座し 後ニ茶二畳物の花入の宗生け

夜とも飾し 又 柱（枝） 花ハ花も川にて宗花中ニ置ハ 風之の
花生中ニ置て茶の脇ニむきを合生中てもし生け
結構ある座し

茶入を次ニ持出し事

一 風呂ハ細入ニ茶入をさし中ニ置事

一 夜咄しの茶ハ細居是也 先さし置事

一 其外茶をすくなく出し 細入ても其考へし

同之事

独参しんたいの事

一 独参いたし候時ハ刻限のこゝろみ合し候待合へ通り候て遅速無之様ニ出仕可有事

一 座入りて風呂なとへ膳を不遅御しゆなとへ不遅候いたし候時ハ一礼挨拶も常よりも御しなといたし候ておいたし候へく

一 膳の御しきハ膳をすへて膳ハ出て御も御相伴衆ハゆるしのなとゝいふて膳をとしめ御気何も御

一所に給仕衆のおく盃参り自分の膳据置御相伴衆に参り御見なとに御相伴衆と申て出も一所に被召やうる盃申候

但し自分の膳にハ菓椀すゑ候にのせて出之

飯すわり候ハ飯器通ひ盃持参飯器さし盃ハ給仕衆か御出も御一所と申候て膳をひきとりおきさうに可申候参らせ候椀一所ニのせけ候て持参出候ハ我おく盃之盃衆のけをおくさせ候に出候の前へ飯器参り候はん

飯を渡る時持出持行一所ニ飯を置、其ニ炉次持出中炉
をしるめ亭主もゆるく相伴して銚子持行飯器持出
其の通吏より炉次段々出客の客ニ亭主一所ニ飯を置
候時客ニ相伴し　又銚子引吸物持出香物　銚子持出吸物
亭主相伴　濃茶過て常の通様子亭主客へ
さびしからぬ様ニなるへしときれぬ様にすへし亭主ゟ
銚子引て後ニ亭主ゟ様子を持行候後亭主とりて
様子口切湯持出して亭主　様子ニて炉の相伴相仕舞

亭主ゟ持出る様を上ケ候ニ付　其後亭主菓子なとも出し菓子
持出る炭を出る炭取ちらく引取て其上ニ出して宗家
手炉次炭斗出す一納く取上仕舞と亭主ゟたく
花生なとを持出き二重切をよし花床の掛物を炉ニ
床柱ニ掛け花二三種持出しる時花ゟ抜き客座し
二重切ハ上の重ニ水を生ル花の下ハ客上の重ニ花生
らく軽も少なくきみなと下の重へ入候亭主花
生けやう其掛置し客其中立して後ニ花生なき

いつしかさし葉入掃ゆる事にむかしに初手は絶境ニ待
念入専らと申ふにいそぎ申けるとのゝ あるべし形式にて
おかしのられは直らと浅葉点へ花も様様も此様仕
度と申ける専らと浅葉ある伝へられがよろし 陸分家の
無んなつせぬ様に専らともうくさき画之家 花あげて
捌る花は何年も続くと申ける花生あげ方ニ拝り
いつきせ事はきわ子細あるし 能し左家 御画之
上手の花家は其時の作意次第成之

家茎所望ありし時ニて

葉の湯通し事

一 葉に茶なるき事らと又は頭花ニて面を入ける時 まとに
て其日の葉の湯通し明後日に其葉湯ハ干絵取り合
花を入て家をいらしける あり是ハ初ニ葉斗入て咲らいらし
のもとに葉小集る悪る時の葉は長し 常居 除ニて花も
よふ里花に忍ぶるき人者 其る事をかくひはは 剣に出とく
今ふは花生花生ハ何ニて ぬし とれ比々 通 紙縄 人ニて

花生の花をも無く　兼ねて花生に飾りたる花合あしく
其所にては其時分花斗御懐中にて地盤の上に生花なと
あるへし　硯ふたに料理も汁ハ菜ハ何程も一種時の菜の
酒の料理として出之て差置し　其外菓子ふ子細なし
清き人の墨蹟かけ物ふかけ申は支
一 清き人の色け物口広なりとさきあるとてひらいて香炉
ふとと飾れる床柱花生釘ふ掛かけのかづらをかけ申はる
又茶釘ふてもするへし回かけのかづらを　天子寺馬のこと

会ふ清客ふかけ物ふかし又掛をとりかけ物ふ無之候て式
主人ハのもとを紙中そ包申之
会席之時ハ相用ふ候事
一 手のこ桶次
一 手めし次
一 汁次
何ぞても手のあるものハ二色之茶之外の香炉ふてハ
御下の人ハきひ中る茶は
一 平皿ふ川豆の坂にて弥ふるとすへし

一 菓子椀に南世菓を盛事は先ハ菓子椀にまひらはぞ
菓ハ盛事なりしされとも他人菓盛に用ひもよしいゝ
志らるも腹白他のなき多數を用ひ事は多数盛てまふ
人ありよろしからぬは菓子入てまひらせあしからすよろし
うしれ
一 南世椀の姫をとりかへし 香の物なとを入おく人あり是ハ悪し
他にてハあやしきゐるき仕業なり 香の物の鉢の不精なき人
ハなりし 何成共鉢に入て出すへし

汁とふの姫くみも香の物入事も同前
一 夏ハ飯次の姫くまゝれをとうけ中に入事
一 焼物に香の物盛合するハ古流之
一 猪口豆折なとにてもよし
一 汁のなき猪にハむかふへ菓椀又何成共猪口出ても
鉢にむかふを姫くみ川に盛し
一 煮物にしても物捨盛ちよくにましおとかけ事
一 口切にハ先者入三川ともなとまに盛し

是ハ庭ぎの象人ある事也
作し外ニ出し来ふ事り

一 かんなべハ家ニ水ニ出して祈事
作りぬり鍋ニ鍋も仰き鍋ハぬり事之

一 鍋ハ返吾文作人ニ是用て百余し飯椀ニ
盛るハかへ所上すられへと様抄事之

一 皿の数時作の物数多へし其中ニ分き一重之の
皿ニと自然とニ百余系椀の皿ニと百余し百桶椀
ニし添き椀よろし夏ハあへ之後しくて百余かへば

ぢらの祈禱之事

一 ぢらハぢらうけといふものありて鍋ちとなの手ニかまく
ぢらニ田の入腹を害かしぢらと我体を一所ニつくしれ
んニ鍋ける祈座し一つ折りて其害を我胴へうけ害胴そ
やふらして其他を祈座し ぢらの害を我胴へうけける

口傳之

今ハ井戸の上ニ立て祈事ニおろしられ